

“追儺”の祭りをご存知でしょうか。節分の豆撒きの起源にあたるようですが、本来は朝廷の年中行事の一つで、大晦日の夜、悪鬼を追いはらうための儀式だそうです。

悪鬼というのは人間には見るできません。そこで登場するのが“方相氏”と呼ばれる陰陽師です。方相氏は、仮面を被り盾を持って、戈で悪鬼を追い払うのです。

纏向遺跡の木製仮面は土坑の下層から出土しましたが、上層からは盾の破片や鎌ないし戈の柄の木製品が出土しました。仮面と戈と盾という方相氏の三点セットがひとまとまりでみつかったことで、一部の研究者は積極的に方

相氏とのかかわりを認めているそうです。ただ一般には、この方相氏に関わる風習は、文武朝の頃に諸国に疫病が流行して百姓が多く死んだので、大儺(おおやらい)を行ったというのが初見ですから、3世紀に中国から伝わっていたか疑問です。また、方相氏は戈と盾で両手がふさがるので、仮面には括り紐を通す耳穴が必要ですが、纏向の木面にはそれがありません。

木面が出土した翌年に開催された「奈良学文化講座」で深澤さんは、鋤を面に行っていることから農耕と関連する穀物神とか再生神を表す面ではないか、また、面は冠るのではなく、手で持って顔に載せて、一人の人がいくつかの面を交互に使って、踊っていた可能性を指摘されています。農耕民の素朴さを感じさせる解釈です。

この木面には、入墨などの顔面装飾はないようです。8月講座のレジメにもありましたが、弥生時代の西日本、東日本の人面には顔面装飾がありますが、畿内の人面には顔面装飾がないという特徴があります。これは畿内に権力が存在し、その権力が顔面装飾を禁じていたのではないかと考え、それを根拠に邪馬台国は畿内にあった(権力=邪馬台国?)と考える研究者がいるようです。

水耕稲作がもたらされて以降、人とともに技術が伝播し、集落が形成されて首長が誕生し、畿内にも複数の拠点集落のネットワークが存在したかも知れません。その規模や組織化は九州や西日本を凌ぐ成長をしていた可能性も否定できません。集権化によって“顔面装飾は文化度を貶める”、として禁じられたとしても不思議ではありません。しかしそれが畿内に邪馬台国があった根拠とするのは、論理に飛躍があり過ぎはしないでしょうか。

魏志倭人伝には、女王国に服さず魏に通じていない国があることが書かれています。列島には、詳細不明の国々が多数あったわけですから、邪馬台国が“列島”最大とは限りません。また、上級官吏である“大夫”と名乗る人(=権力者)さえ、入墨を恥じてはいないようです。邪馬台国で顔面装飾が禁じられていたとは、とても思えないからです。

ところで、纏向遺跡のある奈良県桜井市では2012年4月に「纏向学」の構築と纏向遺跡の調査・研究と発信の拠点としての研究センターを設立し、昨年その10周年記念論文集を刊行されました。この85編に及ぶ論文集の中には、2011年3月、『国立歴史民俗博物館研究報告』の「古墳出現期の炭素14年代測定」で箸墓古墳の築造を240～260年と断定した“前提となる根拠”が間違いであることを示す論文が含まれています。

2011年論文では、当時の国際標準は日本の年代データが反映されていなかったため、歴博独自の較正曲線を使いましたが、最新の国際標準では日本産樹木の年代データを採用し、較正年代の正確性が向上したため、これを用いて統計学的な適合度が計算できるようになりました。その結果、60%以上が求められるモデルの適合度は16%と低く、2011年論文の年代モデルが不十分だったことが明らかになりました。さらなる試料の整理と年代測定を重ねる必要があり、モデルの構築次第ではより明らかな年代を提示できるだろうということです。箸墓築造年代はまだ揺れ動いているようです。

天皇に代わって伊勢神宮に仕える齋王がいた齋宮では、追儺の祭りも古式に則って年の瀬に行われます。応募者から選ばれた人が方相氏に扮し、子供たちを従えて見えない鬼を追い払います。伊勢の友人もいつか応募してみたいとか・・・

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)



『政事要略』にみる方相氏

